

『論理哲学論考』における独我論の整合的解釈に向けて
Toward a consistent interpretation of solipsism in the *Tractatus Logico-Philosophicus*

近藤雅熙

Abstract

The subject of this paper is the issue surrounding the interpretation of solipsism in Ludwig Wittgenstein's *Tractatus Logico-Philosophicus*. This paper argues that the two seemingly conflicting interpretations of solipsism in the *Tractatus*, namely the “Russellian reading” and the “Schopenhauerian reading”, can both hold true at the same time.

And, based on above discussions, this paper presents the possibility that the discussion of solipsism in the *Tractatus* can be analyzed as a relationship between two sets of “solipsism-subject”. According to this interpretation, these two “solipsism-subject” relationships can be analyzed as “Russellian solipsism-the thinking and representing subject” and “Schopenhauer's solipsism- the metaphysical subject”.

(1) 研究テーマ

本稿が研究の対象とするのは、ルートヴィッヒ・ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』（以下『論考』と略記）における独我論の解釈に関する問題である。

(2) 研究の背景・先行研究

『論考』における独我論の議論が何であったのかという問題は、『論考』解釈上の重大な争点の一つであると言える。この問いは、基本的には独我論が議論されている命題 5.6 番台全体をどのように解釈するべきであるかという問題として現れる。『論考』解釈として既に古典の位置を占める Pears(1987)は、「独我論は、ウィトゲンシュタインの様々な思考の流れにおける結節点に位置する」(p.153)と述べ、また、本稿で中心的に取り上げる Tejedor(2015)も、『論考』の独我論に関する議論がこの書物全体の屈折点を表しているこ

とは疑いようがない」(p.73)と主張している。ゆえに、『論考』における独我論の議論を分析することは、結果的には『論考』全体の解釈を確定させる試みに直接的な形で寄与することが期待されるのである。

さて、Tejedor(2015)は、『論考』の独我論に関する先行研究を、ラッセル的な読み、ショーペンハウアー的な読み、そしてマッハ的な読みという三つの型に分類している。本稿はこの分析にもとづいて、ラッセル的な読みとショーペンハウアー的な読みは、『論考』の 5.6 番台に関する解釈として共存可能であると論じることを目標としている。ゆえに、まずは Tejedor に従って『論考』の独我論に関する先行研究を整理することから始めたい。

すでに述べた通り、Tejedor は『論考』の独我論に関する先行研究を三つの読みに分類している。ここでは、マッハ的読みについては本稿の議論との関係を持たないため省略し、「ラッセル的読み」と「ショーペンハウアー的読み」という二つの解釈について紹介する。

第一に、ラッセル的な読みとは『論考』における独我論に関する議論とラッセルの認識論との関係を強調する解釈上の立場のことである。この読みは更に大別されて、ウィトゲンシュタインが『論考』でラッセルの認識論に由来するような独我論の概念を批判したという観点からの読みと、反対に『論考』はラッセルの考えるような「独我論」をある意味では貫徹しようとしたという観点からの読みが存在する(Tejedor(2015), p.48)。このうち、前者は Diamond(2000)に、後者は Pears(1987)に代表される立場であるとされる(cf. *Ibid*, n.8)。だが、そもそも「ラッセルが考える独我論」とはいったい何であるか。

注意しておくべきは、ラッセル自身は独我論的な立場を全くとっておらず、むしろ独我論を反駁することの方に強い動機を持っていたという点である。ゆえに、ここで問題とされているのは、ラッセルが「独我論」ということで具体的にいかなる独我論を意味しようとしていたか、という点である。ここで重要となるのが、ラッセルの認識論における基礎的な概念の一つである「面識 acquaintance」である。面識とは、認識主体とセンスデータの間で成立する関係であるとされるが、このセンスデータは各人に私的なものである。ゆえに、この面識の私秘性に由来する独我論的世界像の可能性は、たとえば『哲学の諸問題 *The Problems of Philosophy*』におけるラッセルにとって重大な問題として立ち現れているように思われる。そして、この面識の私秘性を前提した時に導かれるタイプの独我論を、Tejedor は「ラッセル的独我論」として次のように定式化する(pp.47-48)。

- (a) 面識による知識のみが存在する
- (b) 他我 *other selves* は面識において与えられない
- (c) 私は他の対象と同様に自我 *my self* に対して面識する

結論：

私は面識において私に与えられる、自我と他の対象についての知識のみを有することができる。

ここで対象とはセンスデータのことであると理解してよいと思われるが、ラッセルが自我に関して常に上で定式化されているような見解を採用していたと考えるのは誤導的である。だが、この構図はラッセルがある時期に採用していたタイプの議論を指すというよりは、上の諸前提のどの部分をラッセルが否定し、それによって独我論的な帰結を乗り越えようとしたかという点を明確にする上で役に立つものであると考えられる。

たとえば、Tejedorによると、ラッセルは「面識による知識と記述による知識」において前提 (a) を否定し、『知識の理論』では自我についての知識を「記述による知識」によって知られるものと措定することで (c) を否定している。この (c) の見解は主に『哲学の諸問題』の時期のラッセルに帰される立場であると思われるが、この時期のラッセルはセンスデータからなる各人の私的世界をいかにして公共的世界と接続するかという点に頭を悩ませていたように思える(cf. ラッセル(2005), pp.26-27, McGinn(2006), p.260)。

既に述べたように、Tejedorによれば、『論考』がこのようなラッセル的独我論を攻撃したという解釈(Diamond)と、反対に『論考』はこのような独我論を貫徹しようとしたという解釈(Pears)が存在する、とされる。本稿はこのうち、Diamondに代表される『論考』の独我論解釈を採用するが、Diamond(2000)を直接参照する形でこの解釈を擁護することは行わない。本稿の議論は「『論考』5.6番台の議論はラッセルの認識論的諸前提に対する批判である」というテーゼ(この点はDiamondや、彼女の見解を部分的に引き継ぎながら、ラッセルの認識論に対する批判として『論考』の5.6番台を読もうとするMcGinnに共通している)のみを引き継いだうえで、仮にこのテーゼが正しいとするならば、それはショーペンハウアー的な読みとも両立し得ることを論じるものである。

McGinn(2006)が注目するのは、『哲学の諸問題』においてラッセルが行っている、いわば自我の面識可能性に関する議論である。ラッセルは、「太陽を見ること」を面識するという場面を想定し、次のように述べる。

「太陽を見ること my seeing the sun」を面識しているとき、私は明らかに、互いに関係しつつも異なる一つのものを面識している。一つには、私に太陽を提示するセンスデータがあり、もう一つ、そのセンスデータを見ているものがある。(中略)したがって、自分が太陽を見ていることを私が面識しているとき、面識されているのは「自我-面識-センスデータ」という事実全体である(ラッセル(2005)、62頁)。

その帰結として、ラッセルはためらいながらも「私たちはある意味で、個々の経験と対比されたものとしての自我を面識していると思われる」(同書、63頁)と説いている。McGinnによれば、ウィトゲンシュタインは『論考』6.6番台における命題 5.6331 (視野の比喩) および 5.634 (経験のア・プリアリ性の否定) において、このラッセルの「自我-面識-センスデータ」という認識論的な枠組みを批判している(cf. McGinn(2006), p.264)。この議論の詳細には立ち入らないが、ここで重要なことは McGinn が『論考』5.6番台の議論をラッセル批判の文脈において捉えているという点である(この点は(3)で後述される議論と関わる)。

次に、Hackerに代表されるショーペンハウアー的な読みについても、先述の Tejedor にしたがって簡潔に整理する(p.48)。Tejedorによれば、ショーペンハウアー的な独我論とは「表象—あるいは表象において与えられるものとしての世界—は、超越論的主体の世界である」というテーゼで表現される形式の独我論である。ここで超越論的主体は(ラッセルの自我とは異なり)面識可能な対象や、世界の中に存在するような主体ではない¹。それは、いわば「世界の超越論的条件」としての主体である。この解釈によれば、表象としての世界は、その超越論的条件としての主体を必要とするのである。『論考』期のウィトゲンシュタインがショーペンハウアーの『意志と表象としての世界』に影響を受けていたことは周知の事実であるが、このことを踏まえ、Hackerに代表されるショーペンハウアー的な読みをとる解釈者は、ウィトゲンシュタインが『論考』においてこの形式の独我論を主張していると解釈している。

以上が Tejedor による説明であるが、Hacker(1986)の解釈は、文献学的な傍証という点から見て十分な根拠を持つように思われる。また、Hackerはショーペンハウアー的な読みを踏まえた上で、『論考』の独我論を「超越論的独我論 Transcendental Solipsism」と規定する(Hacker(1986), p.104)。

(3) 筆者の主張

先述した通り、本稿はこれらの独我論解釈が両立可能であることを示すことを目標としている。二つの解釈の大きな違いは、一方が『論考』はラッセル的な独我論を否定している」と主張するのに対し、他方が『論考』はショーペンハウアー的な独我論を肯定している」と主張するという点にある。だが、この二つの議論は両立させることが可能であるように思われる。

仮に、これらの解釈が『論考』は独我論を否定している」という立場と『論考』は独我論を肯定している」という立場であるとすれば、この両立は端的に不可能である。しかしながら、先に挙げた二つの解釈はそのような対立構造を持っていない。すなわち、これらの解釈は（実際に両立するかどうかは別として）形式的には両立させることが可能であると述べることができる。ゆえに、本稿はこの形式的な両立可能性を元手にして両解釈の具体的な共存可能性を探りたい。

第一に、ラッセル的な読み（Diamond, McGinn など）によれば、『論考』は独我論の議論においてラッセル的な独我論を否定している。そして、この解釈は文献学的な傍証は不足しているように思えるものの、『論考』の議論が（ウィトゲンシュタイン自身は意図していないものであったとしても）結果的にラッセルの認識論に対する反駁となっている、ということは十分に成立可能であるように思われる。

たとえば、McGinn は命題 5.6331、5.634 をラッセルの認識論に対する批判として読もうとしているが、仮にこの見立てが正しいとするならば、『論考』の命題番号の振り方を踏まえることで、命題 5.63 番台が全体としてラッセル批判に向けられていると解釈することは可能であると考えられる。命題 5.63 は「私は私の世界である」²と述べているが、これは『論考』における独我論テーゼ「世界が**私**の世界である」(5.62)とは異なる。ラッセル的な独我論は、世界と私を分離したものとして捉えた上で、「私が世界を面識する」という認識論的構造を作り出すものである。したがって、少なくとも『論考』の独我論テーゼと形式的には等しい（だが、独我論の概念はそこにおける「我」の性格に応じていくつものヴァリエーションを生じる）。それに対して、「私は私の世界である」というテーゼは、それ自体が「世界を認識する」という性格をもつ私を排除するものとなる。ゆえに、5.63 番台はこのように捉えられた（世界を認識するものとしての）主体という概念の否定により始められていると考えられる。

命題 5.63 に続く 5.631 は、「思考し表象する主体は存在しない」と主張す

る。そして、ここで否定される主体をラッセルが面識において考えていたような主体と同一視することは、続く 5.631 の記述からも可能であるように思える。そこでは、「私が見出した世界」という本を私が書くという想定の下、「ある重要な意味において主体が存在しない」(5.631) と述べられている。この 5.631 の記述と 5.6331 の視野の比喻とは、5.63 番台がラッセル批判の文脈において捉えられるならば、相互に関連したものとして読むことができる。

ゆえに、5.63 番台において、「ある意味において主体が存在しない」ということが主張されており、この主体が（偶然か意図されたものかは明確でないにしても）ラッセル的な主体を指すと考えることは許されるように思われる。また、この視野の比喻がラッセル的な認識論を批判しているという主張は、例えば McGinn によって既に行われている。McGinn は P. Sullivan による議論を踏まえつつ、この視野の図（限界づけられた視野の左端に視点としての眼が描かれている）は二つの点で誤っていると述べる。すなわち、第一に、主体を実体としたこと（つまり、視野の中に書き込んだこと）、そして、第二に視野を限界づけられたものとして描いたことである (McGinn(2006), p.265. Cf. p.264)。

しかし、『論考』5.63 番台は「独我論」という表現を用いてはいない。ゆえに、この解釈が十全なものとなるためには更に別の根拠を必要とするように思われるのである。そこで、その候補として本稿が提案したいのは命題 5.64 の記述である。5.64 は「ここにおいて、独我論を徹底すると純粋な実在論と一致することが見てとられる」と述べている。この命題は『論考』の命題番号の順序によれば 5.6 の注釈であり、またここで現われる「独我論」の表現は命題 5.62 において「(その) **言わんとする**ところはまったく正しい」と主張される「独我論」と同一の独我論を指すと考えられてきたように思われる。

だが、これについては幾つかの疑問を立てることが可能である。第一に、仮に 5.64 の「独我論」が 5.62 のそれと同一の概念であるならば、それを（「**言わんとする**ところはまったく正しい」とされるにもかかわらず）「徹底する」ということの意味が不明となる。第二に、「ここにおいて Hier」という指示語が単に命題 5.6 を指すと考えるのは、この解釈が『論考』の命題番号のシステムにもとづいているために反駁困難であるとはいえ、文脈上はやや突飛であるように思われる。そして第三に、命題 5.64 は「純粋な実在論」に関して述べており、その点では 5.63 番台と同様に認識論的なことがらを問題にしていると解釈することには一定の整合性があるように思われる。

以上から、本稿は命題 5.64 における「独我論」がラッセル的な読みにおけ

る「否定される独我論」を指示しているという可能性を提示したい。この解釈の正しさについては、なお議論の余地がある。しかしながら、このように仮定することは次に述べるショーペンハウアー的な読みと、ここでのラッセル的な読みとの共存可能性を高めることにつながるのである。

さて、ショーペンハウアー的な読みは『論考』において、ウィトゲンシュタインはあるタイプの独我論を正しいものとして主張している」と解釈する。そして、この見立ては命題 5.62「すなわち、独我論の**言わんとする**ところはまったく正しい」という記述から正当化されるように思われる。だが、このショーペンハウアー的な読みはラッセル的な読みと両立可能である。

第一に、命題 5.63 番台は「思考し表象する主体」を否定しているとともに、「形而上学的な主体」(5.633)という新たな主体概念を導入している。そして、この「形而上学的主体」は「思考し表象する主体」とは異なり「世界の限界」であるとされており、存在しない主体概念として措定されているわけではない（思考し表象する主体は「存在しない」(5.631)のに対し、形而上学的主体は「世界に属さない」(5.632)）。また、5.632の「主体」が「形而上学的主体」を指していることは、5.633や5.641などの命題から明らかであると思われる(cf. Hacker(1986), p.86)。つまり、5.63番台はHackerが「世界の超越論的条件」とするような主体である「形而上学的主体」についても論じていると考えられる。換言すれば、5.63番台はラッセル的な読みとショーペンハウアー的な読みの双方に（一方の読みを否定することなく）関係していると思われる。

第二に、5.64における「(徹底された場合には)純粋な実在論と一致する」とされる独我論を、ショーペンハウアー的な読みにおける独我論の理解と重ねることは可能である。「[その] **言わんとする**ところはまったく正しい」と言われる独我論は、当の5.62の記述から見てとられるように、「**私の言語の限界**が私の世界の限界を意味する」という命題5.6のテーゼと密接に関係している(cf. 5.62)。そして、独我論が常に主体（「我」）の概念を伴うことを考えあわせるならば、この独我論における主体が「形而上学的主体」であると考えすることは自然であるように思われる。

また、上述の想定には別の根拠づけを与えることも可能である。5.64は続けて「独我論の自我は広がりやを欠いた点にまで縮退し、自我に対応する実在が残される」と述べている。この5.64に対する注釈である5.641は、「それゆえ、哲学において、自我について心理学的にではなく論じうる意味が、確かにある」と述べており、この「自我」は「世界の限界」としての「形而上学的主体」であるとされる。ここで5.641の「それゆえ」という箇所は（命

題番号のシステムから) 明確に 5.64 の記述を受けたものであると考えられるため、5.64 の「自我」は「形而上学的主体」のことを指すという解釈が成立可能であるように思われる。ゆえに、この見立てが方向として正しいのであれば、5.64 は 5.62 における「([その] 言わんとするところはまったく正しい) 独我論」と同じ独我論を意味すると述べることができる。

以上より、ラッセル的な読みとショーペンハウアー的な読みは対立することなく共存可能であることを本稿は主張する。そして、この解釈におけるポイントは、5.64 の「独我論」が二種類の独我論、すなわち「否定される独我論」と「肯定される独我論」を二重に意味しうると読むことにある。なお、5.64 では「独我論」の表現が二度現れる。これを踏まえ、一方を「否定される独我論」に、他方を「肯定される独我論」に結び付ける解釈を提示することも(今後の議論として)可能であるように思われる。

(4) 今後の展望

これまでの議論が認められるならば、なお細部を詰める必要はあるものの、今後の展望として『論考』の 5.6 番台における独我論に関する議論を「思考し表象する主体」と「形而上学的主体」という二つの主体概念に着目する形で、二組の〈独我論-主体〉のペア、すなわち、〈ラッセル的な独我論-思考し表象する主体〉および〈ショーペンハウアー的な独我論-形而上学的主体〉として分析するという解釈が成立し得る。この場合、前者は『論考』において論じられているものの、全体として否定され、後者は『論考』において論じられており、かつ全体として肯定される、と整理することができる(これら二つの「独我論」部分には他の独我論解釈を対応させることも可能である)。そして、このように分析することは、『論考』の多様な独我論解釈を〈独我論-主体〉の組をめぐる解釈という形で再構成することを可能とするように思われる。

注

- (1)ここでは、原文におけるイタリック体の箇所を太字で表現する。
- (2)以下、『論考』からの引用は邦訳(野矢(2003))から行い、邦訳の傍点部を太字により表現する。なお、引用箇所は命題番号で示す。

(5) 参考文献

Diamond, C. "Does Bismark Have a Beetle in his Box?", in *The New*

Wittgenstein, ed. by Alice Crary & Rupert Read, 262-292 (London & New York: Routledge, 2000)

Hacker, P.M.S. *Insight and Illusion*, Revised (Oxford: Oxford University Press, 1986)

McGinn, M. *Elucidating the Tractatus: Wittgenstein's Early Philosophy of Logic & Language* (Oxford: Oxford University Press, 2006)

Pears, D.F. *The False Prison*, Vol.1 (Oxford: Oxford University Press, 1987)

ラッセル、バートランド『哲学入門』高村夏輝訳、ちくま学芸文庫、2005年

Tejedor, C. *The Early Wittgenstein on Metaphysics, Natural Science, Language, and Value* (London & New York: Routledge, 2015)

Wittgenstein, L. *Tractatus Logico-Philosophicus*, tr. by David Pears & B. F. McGuinness (London: Routledge & Kegan Paul, 1974) / ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』野矢茂樹訳、岩波文庫、2003年

(千葉大学)